

## 序

一八世紀初頭のイギリス<sup>(1)</sup>で、「風景式庭園」(landscape garden)という独自の庭園様式が出現する。これは、従来ヨーロッパの主要な庭園様式であった幾何学的・人工的「整形式庭園」(regular garden)とは異なる、自然風の開かれた庭のことである<sup>(2)</sup>。この風景式庭園は、一八世紀当時から「イングリッシュ・ガーデン」、つまり「イギリス式庭園」(the English garden)とも呼ばれ、イギリス独自の庭園様式とされてきた。しかもそれは、一八世紀にはいまだ近代的な芸術概念が確定していなかったことも手伝って、「自由芸術」(the liberal arts)の一つ、ときにはほとんどその筆頭とさえ見なされたのである<sup>(3)</sup>。

近年の優れた概説書、高橋裕子『イギリス美術』に見られる次の一文は、この自然風の風景式庭園ないしイングリッシュ・ガーデンにかんする、今日の標準的理解を示す好例といえよう。

「西欧芸術におけるイギリスの最大の貢献の一つが 庭園革命 であることは、だれしも認めざるをえない」……十八世紀初頭に出現、「イギリス式庭園(イングリッシュ・ガーデン)」としてヨーロッパ各国にも広まった庭園を、十七世紀末のヴェルサイユ宮殿の庭に代表されるような「フランス式庭園」と比べると、庭園の概念が根本的に変化していることがわかる。……「イギリス式庭園」には、幾何学的規則性は存在しない。… …あちこちにある木立は雑木林で、木は刈込まれることなく、自由に枝を伸ばしている。池ももともと自然にそこにあるように見える。……自然を尊重するこうした方針の結果 ……イギリス式庭園は、情緒に訴えて、心地よい物思いにいざなうことになる。<sup>(4)</sup>

むろんこれは誤りではない。とはいえ問題にしたいのは、こうした言説に含まれる或る隠れた傾きである。それをたどることによって、イングリッシュ・ガーデンにかんする今日の標準的理解が、実は特殊な歴史的経緯に由来することが明らかになる。

まず指摘すべきは、この一文によると、一八世紀前半のイングリッシュ・ガーデンまでもが、「幾何学的規則性は存在しない」ほど「自然を尊重する」ものだった印象を与えることである。しかしこれは、現在知られる庭園史の事実とは反する。すなわち一八世紀前半のイングリッシュ・ガーデンは、幾何学的規則性と自然とを半々に用いた、相当ていど人工的なものであった<sup>(5)</sup>。さらにこの一文では、イングリッシュ・ガーデンが「情緒」や「心地よい物思い」を理想としたと説かれている。しかしそうした理想もまた、一八世紀後半のいわゆる「プレ＝ロマン主義」ないし「感受性の時代」になってはじめて前面に現れるものにすぎない<sup>(6)</sup>。要するにこの一文、そしておそらく今日の標準的理解を作り上

げているのは、一八世紀後半に支配的となったイングリッシュ・ガーデン観なのである。

繰り返せば、このような標準的理解が誤りだというのではない。たしかにそれは一八世紀前半という比較的短い期間にはあてはまらないかもしれない。しかしそれがその後、人々の観念と実践を支配し続けてきたことは事実である。すくなくともその限りでは、こうした理解は正しいといえる。ただ、反省の余地があるのは、なぜ、いかにしてこのような理解が一八世紀の後半に出現したかである。以下われわれは、従来かならずしも解明されてこなかったこの歴史的な経緯を探りたい。おもな考察対象としては、当時の広い意味での庭園論的な言説を用いる。とりわけ光を当てたいのは、今日の標準的理解の要をなす次の二つの常識である（それは上の高橋氏の一文でも中心的論点であった）。第一に、イングリッシュ・ガーデンないし風景式庭園が、その土地の自然のみに基づく、ないしそれに土着であること。第二に、その点でそれは「根本的」に新しいこと。つまりそうした自然風の庭園は、イギリス独自の発明品であるということ。一言でまとめれば、イングリッシュ・ガーデンが 自然的 かつ 独創的 だということである。

この二点は、一八世紀後半の庭園論的な言説ではじめて主張されるようになる。われわれはその経緯を探る具体的な導きの糸として、とりわけ「オリジナル」という概念に注目したい。周知のとおりこの語は、「独創的天才」(original genius)の形で一八世紀後半、人口に膾炙した<sup>(7)</sup>。とはいえそれは、同時代の庭園論においても、イングリッシュ・ガーデンを形容するものとしてかなりの頻度で現れる。そうした用例においてこのオリジナルの語は、まさしく先の二つの意味、すなわちイングリッシュ・ガーデンの 自然性 と 独創性 とを表わすものとして用いられたのである（ちなみに、フランス語においては、両者は各々、originaire および original として区別される）。

この意味におけるイングリッシュ・ガーデンの「オリジナリティー」は、なぜ、いかにして一八世紀後半に主張されはじめるのか。なるほどその大前提として、それ以前のイギリスには、自然風の、独自の庭園が存在しなかったという事実があろう。しかしわれわれがさらに示したいのは、そこに同時代の特殊な政治力学が抜き差しがたく関与していたことである。そこであらかじめ結論を示せば次のようになる。すなわち一八世紀後半のイギリス庭園論で、イングリッシュ・ガーデンのオリジナリティー（自然性と独創性）は、イギリス内外の政治情勢と深く関連し、特定の政治的イデオロギーの表明として、イギリスの先進性・優越性を打ち立てるアイデンティティー戦略のために主張されたと考えられるのである。

以下、イングリッシュ・ガーデンを「オリジナル」とするこうした言説を検討する前に、まずその種の主張が一八世紀後半にはじめて現れることを確認しておこう。

## 第一節 イングリッシュ・ガーデンの「イングリッシュネス」 一八世紀半ばの出現

そもそもイングリッシュ・ガーデンは、正真正銘オリジナルか。つまりそれは本当に自然のみに基づき、イギリス独自か。当然この点にかんしては異論があろう。まず、イングリッシュ・ガーデンも人工品であることにはかわりはないから、それがどれほど自然を装おうと、オリジナルな自然たりえない。この点はすでに、一九世紀初頭のイギリス人造園家、レプトンが強調していた<sup>(8)</sup>。また、イングリッシュ・ガーデンはイギリスの独創かという点についても、すでに一八世紀以来、数々の疑問が出されている。たとえば当時フランス人は、愛国心も手伝って、風景式庭園をフランス起源あるいは中国起源とし、ときにそれを「イギリス＝中国式庭園」(jardin Anglo-Chinois)とも呼んだ<sup>(9)</sup>。さらに現在この分野の最も重要な研究者であるハントも、イギリスの風景式庭園がイタリア・ルネサンス庭園の模倣として誕生したと力説する<sup>(10)</sup>。

とはいえここでの課題は、この種の事実関係を詮索することではない。むしろわれわれが目にするのは、当時の言説の内部でイングリッシュ・ガーデンがいかに見られたかである。

まず、すくなくとも一八世紀初頭の言説において、自然風でイギリス独自のガーデニングという観念がなかったことは、ほぼ確実といってよい。たとえば1712年、フランス式庭園の制作マニュアルを英訳した訳者は、フランスの進んだ人工の様式をイギリスに導入せよと説く。

本書が提出する〔フランス式の〕デザインは、これまでガーデニングにかんする書物の中で公にされてきたあらゆるものを圧倒的に凌駕する。それゆえわが国〔イギリス〕の指針が、これらのデザインに従ってゆけば(その見込みは高い)遠からずイギリスの楽しみのは庭は、フランスやイタリアの最も名高いものよりも完璧になろう。なぜなら本書がおもに論ずる森や木立、草地や砂利は、そうした諸外国よりもイギリスにおける方が、優れた緑や自然美を備えることが許されているからである。<sup>(11)</sup>

なるほどここには、イギリスの庭園が、大陸のものよりも自然に近くなりうることが予感されているといえるかもしれない。しかし全体として説かれるのは、あくまで人工的なフランス式庭園の模倣でしかないのである。

類似の事情はアディソンにも見られる。彼は風景式庭園を事実上最初に提唱したやはり1712年の新聞記事でいう。イギリスの庭園は、「自然の偉大で荘厳なものを模倣する」ことがすくない。「だからこそイギリスの庭園は、フランスやイタリアの庭園ほど想像力を楽しませない」<sup>(12)</sup>。アディソンはこれを根拠に、イギリスでも自然風の庭園を建設せよと提唱する。つまり彼にあって風景式庭園とは、フランスやイタリアの庭園の模倣にほかならなかったともいえるのである。そしてここでもやはり 自然風でイギリス独自のガーデニング という観念は見られない。

それどころか、イギリス人が実際に風景式庭園を造りはじめた後になってさえ、同様の事態は続く。たとえば 1725 年、ブラッドリはイギリスの庭の人工性を批判し、古代の自然風庭園を復活せよと説く。

〔現代イギリス人は〕極度の規則性を用いるが、それによって古代の庭園の性質を少しも改善していない。こういう規則性は、図面上ではよく見えても、実際に造ると生硬でうんざりする。われわれの現代の設計では、すべてが一挙に見えてしまい、期待のもたらす喜びがない。<sup>(13)</sup>

これに代えてブラッドリが提唱する古代の理想とは、「不規則的な土地の自然の美を保存し、さらには改良する」こと、あるいは「自由で開かれた、可能なかぎり多様性に富む」庭園、つまりは風景式庭園にほかならない<sup>(14)</sup>。実際彼は、初期風景式庭園の代表作、チジック荘を、そのような古代の理想を体現した庭園とする<sup>(15)</sup>。つまり自然風の風景式庭園は、イギリス独自ではなく、古代の模倣と捉えられているのである。

ところが、事態は一八世紀の半ばに変化する。その最も早い兆候は、別の代表的な初期の風景式庭園であるストウについて書かれた、1748 年のフランス語ガイド・ブックに見られよう。フランス人とおぼしき匿名の著者は、この庭園が自然風である点を強調する。しかも著者は、それがイギリス独自だという。

ここには噴水も、〔人工的な〕オレンジ温室も、刺繍花壇も、左右対称の装飾品も見られない。……イギリス人は、刺繍花壇の退屈な規則性に耐えられないのだ。そして喜びよりも頭痛と不快をもたらすことの多い、大量の花を植えたりなどしない。イギリス人はそうしたものよりも、緑の絨毯や最高にきれいな芝地が、美しい並木、大きな湖、この上なく広く変化に富んだ眺めをもつのを好む。<sup>(16)</sup>

この イギリス独自の自然風ガーデニング という観念が決定的に現れるのは、1755 年にシェビーアが偽名で出した、『イギリス国民についての書簡』であろう。当時広く読まれたこの書物は、イギリス人の書いたものだが、或るイギリス通イタリア人の手紙を英訳したものと仮託されている。

庭園と植栽を最初に改良したのはイタリア人で、次にフランス人がそれを凌駕した。さらにイギリス人が、イタリアやフランスで見られた以上に、その美化の趣味を高めた。イギリス人は、ヨーロッパの他の部分における庭園デザインのすべてを形作るあの規則性を排除する。……イングリッシュ・ガーデンは、すべてを変化させる自然の表面に適応している。<sup>(17)</sup>

こうした主張が、先のストウのフランス語ガイド・ブック同様、外国人の視点を通してなされている点は注目に値しよう。この 対外的まなざし については後に触れる。とりあえず確認すべきは、自然風でイギリス独自のガーデニング という観念が、一八世紀半ば以降はじめて出現することである。そしてこの観念は、一八世紀後半の庭園論的言説においては、「オリジナル」という語によって表現されることになる。次にその代表例を見よう。

## 第二節 イングリッシュ・ガーデンは「オリジナル」である 価値のアウラとイギリスの先進性・優越性

イングリッシュ・ガーデンの自然性 先述のとおり、一八世紀後半の庭園論において「オリジナル」の語は、特徴的な二つの意味で用いられた。すなわちイングリッシュ・ガーデンが自然のおよび独創的だという意味である。以下この順に検討し、オリジナルの概念が、容易に価値のアウラを帯びてしまうことを示したい。

まず、自然的 の意味でこの語を用いる典型として、当時の最も重要な風景式庭園論、ウエイトリの『現代造園論』(1770年)を挙げよう。彼はオリジナルの語を一種の術語として用いる。彼によれば、庭園の個々の景観は「快活」「荘厳」「静けさ」といった特定の感情性を表現せねばならない。この感情性、ないし彼の言葉では「性格」(character)は、「エンブレムの」「模倣的」「オリジナル」の三つに分けられる<sup>(18)</sup>。

第一のエンブレム的な性格は、碑文や彫刻といったアレゴリーによって、いわば間接的に感情性を表示するものである。これは一八世紀前半には盛んに用いられた手法だが、ウエイトリはそれを明確に批判する<sup>(19)</sup>。第二の模倣的性格は、たとえばアルカディアのような、文学で有名な景観等を再現するものである。ウエイトリはこの模倣が「虚偽」にすぎず、困難である点を強調する。第三のオリジナルな性格は、庭園が位置する場所の自然、ないし「土地の精霊」のみに基づく。これは一八世紀後半の代表的造園家、「ケイパビリティー」・ブラウン(Lancelot 'Capability' Brown, 1716-83)の様式に対応するものといえよう。ここでオリジナルの語は、景観の「コピー」との対比で用いられており、自然的ないし土着的と同義といってよい。

重要なのは、以上からもわかるとおり、オリジナルな性格がエンブレムの・模倣的な性格よりも優越することであろう。ウエイトリの言葉でいえば、オリジナルな性格は、エンブレムの・模倣的な「言及(allusions)よりも優れた表情を個々の景観に与える」のである<sup>(20)</sup>。なるほどウエイトリの庭園論は網羅的であって、彼はエンブレムの・模倣的性格も条件付きで認める。しかしその条件とは次のことでしかない。すなわち、まず第一のエンブレムの性格についていえば、

その主題は、庭園の自然に属さないから、それが中心になってはならない。景観自体が示唆したようであればならず、あらがいがたく生じた束の間のイメージでなくてはならない。苦労して作ったようであってはならない。隠喩の力をもたねばならず、アレゴリーの細部をもってはならない。<sup>(21)</sup>

すなわちエンブレムの性格は、できるだけ自然的・土着的でなくてはならず、つまりはオリジナルな性格に近くなければならないのである。同様に第二の模倣的性格についても、ウエイトリはそこに、「模倣であるという意識」が混ざってはならないという。いいかえれば模倣的性格も、オリジナルな性格と同一視されるときにのみ許容される。したがって要するにウエイトリの庭園論では、その土地に土着ないし 自然的 という意味のオリジナリティーこそが理想とされる。そしてこのオリジナリティーは、明らかに価値のアウラをまといつつある。

自然の漸進的解放という物語 のみならず一八世紀後半の庭園論では、この庭園の自然性が、一八世紀イギリスにいたってはじめて実現されたと繰り返し主張される。すなわち従来の人工的・幾何学的庭園は、自然を無視・抑圧していたが、それが近年のイギリスで漸次解放されたという物語である。こうした進歩史観、勝利者史観、ないしホイッグ史観は、先のシェビーアにも見られた。しかしそれがいっそう顕著になるのは、庭園史の言説であろう。

ここでは 1767 年出版の、『林苑・遊園・庭園の植栽における現代の趣味の発生と進展』という匿名の詩を例に用いたい。これは風景式庭園の歴史を述べたものとしては、おそらく最初の独立した論考だからである。すでにその題名自体、進歩史観をうかがわせよう。実際、詩の全体は、イギリス庭園が一六・七世紀以降、ミルトン等を経て、徐々に人工から解放されてゆくという、直線的な勝利の物語となっている。

こうした歴史観は冒頭から示される。「ついに人工の色香は衰え、愛すべき自然がその魅力を取り戻す。……今や自然はアルピオン〔イギリス〕で支配する」<sup>(22)</sup>。そしてこの自然の解放は、先にも言及した「ケイパビリティー」・ブラウンの造園で頂点に達する。「自然に優美を与え、自然の作品を、美しく崇高偉大なすべてのもので完成すべく生まれた者。詩神はこぞって……この不滅のブラウンを名声の神に捧げる」<sup>(23)</sup>。その結果、純粹に土着の自然のみに基づく庭園が出現する。「自然はおのれに内在する優美のみによって喜びを与え、みずからのかんばせの生まれつきの (native〔土着的な〕) 美のみをまとう」<sup>(24)</sup>。かくして一八世紀に達成されたイングリッシュ・ガーデンの自然性は、ここでも価値のアウラを付与され、しかもイギリスの先進性・優越性をほのめかすものとなっている。

イングリッシュ・ガーデンの独創性 このようにイングリッシュ・ガーデンが自然のみに基づき、しかもその自然の解放が一八世紀イギリスではじめて実現したのだとすれば、イングリッシュ・ガーデンは、イギリス独自の発明品ということになる。いいかえれば、イングリッシュ・ガーデンを 自然的 とする主張は、進歩史観に支えられて、それを 独

創的とする主張を導く。実際、一八世紀後半の庭園論において、イングリッシュ・ガーデンの独創性もまた、「オリジナル」という語を用いて主張されることになる。

たとえば、1763年に書かれ1775年出版の書簡の中で、詩人グレイは、風景式庭園こそが、イギリス唯一の芸術的独創であると断じる。

われわれ〔イギリス人〕のものと呼べる唯一の趣味。〔美的な〕喜びの事柄にかんするわれわれのオリジナルな才能の唯一の証し。それはガーデニング、ないし土地の配置におけるわれわれの技〔＝風景式造園〕にほかならない。これはわれわれにとって少なからぬ名誉だ。イタリア人もフランス人もそれをまるで考え付かず、見ても理解できないのだから。……われわれが中国人からなにも模倣していないのは明らかだ。われわれのモデルは自然のみだった。イギリスでこの芸術が誕生して四十年も経たないが、当時、ヨーロッパに似たものがなかったのは確実である。<sup>(25)</sup>

ここでも先の進歩史観が繰り返されている。つまり土着的な自然に基づく風景式庭園は、わずか四十年ほど前(1730年頃)のイギリスではじめて出現したというのである。しかもこのイングリッシュ・ガーデンの自然性ないし土着性が、その独創性を支えている。すなわち、風景式庭園は「自然のみ」に基づく。だからこそイギリスは、それを他国から「模倣」する必要がなかったというのである。そしてここでもイングリッシュ・ガーデンのこの二つのオリジナリティーは、価値のアウラを帯び、イギリスの先進性・優越性の証しとなっている。

われわれが示したいのは、こうした主張が勝れて政治的だったことである。次にこの政治性をいっそうあらわに示す同時期の言説を検討しよう。

### 第三節 政治的自由と自然風庭園との因果関係 改革派のイデオロギーと庭園論

ここで取り上げるのは、二人の文人、すなわちウィリアム・メイスンとその友人、ホレス・ウォールポールである。まずイングリッシュ・ガーデンのオリジナリティーと政治との関係を明確に理論化した後者ウォールポールを見よう。

ウォールポールの庭園論の重要性は、改めて指摘するまでもない。彼の『現代造園の趣味の歴史』(1771年)は、一八世紀イギリスをテロスとする進歩史観の定式化に最も力のあった書物であり、今日でもカノンとしての地位を保つ。それについては後に触れよう。ここではむしろ、政治との関係をより鮮明に示すものとして、彼が友人メイスンの諷刺詩に付けた注釈書(1779年頃)を引きたい。

ウォールポールはそこで、自然的・独創的のいずれとも取れるような意味でイングリッ

シュ・ガーデンを「オリジナル」とする。そして当然、一八世紀イギリスにおける自然解放という進歩史観を繰り返す。しかも、このイングリッシュ・ガーデンのオリジナリティーをイギリスの先進性・優越性の証しとする点で、彼の口調は露骨ですらある。

庭園ないし土地の配置における自然の模倣は……完全に新しい芸術である。それはオリジナルであり、イギリスのものであることに異論の余地はない。……野蛮人は人工を求める。しかしどの芸術であれ、〔趣味の〕基準となるものを生み出した国に軍配を上げさせるのは、自然の模倣と改良である。<sup>(26)</sup>

ではなぜ、近年のイギリスのみが風景式庭園を独創しえたのか。この問いへの解答として、ウォールポールは 政治的 な説明を試みる。

造園における〔自然風の〕趣味が、なぜ一八世紀初頭まで発見されなかったのか。それには次の諸要因が、幸運にも組み合わせられねばならなかったからである。すなわち或る国が、自由人の帝国であり、しかも軍隊と征服の精神ではなく、商業で作られた帝国であること。そしてその国は、自立した財産のもたらす剛毅でもって維持され、徳高い闘争の後に長期の安寧を享受し、富と良い感覚とを、理に適った快の洗練に傾ける国であること。<sup>(27)</sup>

要するにイギリスは、政治的（さらに経済的）な「自由」の帝国であるがゆえに、自然風の庭園を独創しえたというのである。別言すれば、「イングリッシュ・ガーデンの趣味は、イギリスの憲法政体（Constitution）の産物であり、この憲法政体がなければ消滅する。それは恣意的〔専制的〕な政治の下ではまれにしかありえない」<sup>(28)</sup>。

ウォールポールは、このイギリスの政治的自由と自然風庭園との因果関係を証明すべく、さまざまな具体的説明をおこなう。たとえば自由を欠く専制国家では、すべてが軍事目的や少数の人間の金銭欲に奉仕する。それゆえ多くの人々が長期間土地を所有し、庭園を造営・維持・利用することはできない。しかも風景式庭園は、従来の壁に閉ざされた人工的庭園を、いわゆる「八八（隠し堀）」によって開くことで誕生した<sup>(29)</sup>。しかし専制国家において壁を開いても、見えるのは人々の悲惨でしかない、等々。

こうしたイングリッシュ・ガーデンのオリジナリティーにかんする政治的な説明は、同時代のアクチュアルな政治情勢と深く関連していた。たとえばウォールポールは同書でいう。「アメリカ独立戦争〔1775年～〕以前の大英帝国ほど広い帝国はなかった。それはまことに自由であり、しかも軍事的な体質〔政体〕を欠いていた」<sup>(30)</sup>。ここでウォールポールが、大英帝国の自由を過去のものとする点に注意しよう。すなわち彼はアメリカ問題以降、イギリスの憲法政体が墮落したと訴えているのである。その原因は、当時の国王ジョージ三世と「トーリー」的政権が、名誉革命（1688/89年）以前のような専制への後戻り



を企てていることに求められる。

専制君主の大権に雇われた手先たちが、イギリス国民の道徳と規律とを墮落させ、愛国心を誤らせるべく遣わされている。……やつらは自由の守護者と殉教者を中傷し、アメリカへの鎖と虐殺を説き……法とコモンセンスに戦いを挑む。……そして〔名譽革命時の〕ウィリアム〔三世〕の記憶を、〔ハノーヴァー〕家第三代目の君主〔時のジョージ三世〕でもって中傷すべく雇われる。<sup>(31)</sup>

もしもこうしてイギリスの自由な憲法政体が失われれば、「大俗人や小俗人どもが、イギリスの純正なガーデニングの趣味を確実に墮落させよう」<sup>(32)</sup>。すなわち、「イギリスの憲法政体の産物」としての自然風イングリッシュ・ガーデンも、当然消滅する、というのである。かくしてウォールポールにおいて、イングリッシュ・ガーデンのオリジナリティーにかんする主張は、そのまま同時代の特定の反＝専制的イデオロギーを表明したものとなっている。

改革派のイデオロギーと対外的まなざし 今こうしたイデオロギーを、広い意味における「改革派のイデオロギー」と総称しよう。というのものそれは、当時のイギリスで盛んだった議会改革運動と直結するからである。たしかにこのイデオロギーの根は、一八世紀初頭の風景式庭園の誕生期から存在し、しかもそれは最初から庭園と密接につながっていた。すなわちイギリス古来の共和主義的自由の護持を訴えた一八世紀初頭の在野勢力、いわゆる「カントリー」陣営のイデオロギーは、さまざまな形で初期の風景式庭園を支えたのである<sup>(33)</sup>。しかし一八世紀後半の改革派のイデオロギーは、以前のカントリー・イデオロギーよりも普遍的で徹底している。すなわち以前のカントリー・イデオロギーが求めたのは、あくまで議会内・体制内の、内輪の政権交代だけであった。それに反して今や改革派のイデオロギーは、議会外の勢力をも巻き込み、世襲貴族制を含むイギリス政治体制全体を変革せよと迫るのである<sup>(34)</sup>。

この普遍化をもたらした一要因は、海外への対外的まなざしであった。つまり改革派のイデオロギーは、1756-63年の七年戦争（アメリカではフレンチ＝インディアン戦争に該当）によって急増した、大英帝国の植民地をいかに管理するかという、当時のイギリスにとっての大問題を背景に成立する。ここで決定的なのは、ウォールポールも言及していたアメリカ問題であった。実際 1779年には、悪化するアメリカ独立戦争への危機感から、イギリス中北部のヨークシャーで議会改革を求める政治集会が開かれる。そしてこれが全国に波及し、「ヨークシャー運動」として概括される、ラディカルな改革派の全国運動が開演するのである<sup>(35)</sup>。

この改革派のイデオロギーによれば、アメリカをめぐるイギリスの失態をもたらしたのは、国王ジョージ三世の専制的な政治介入、そして究極的にはイギリスの歪んだ因習的代議制であった。すなわち、イギリスはアメリカ植民地に課税しながらその政治的自由を圧

迫し、代議員の選出を拒んだが、同じ不正はイギリス国内にも妥当するというのである。具体的には、議員の定数割が有権者の勢力布置と対応せず、国家運営が国民の真の利害を反映していない。その結果、特に勃興しつつある都市産業ブルジョアの政治的自由が侵害されている。これにたいして改革派は、真の国勢に根ざした代議制、いわば自然的な代表(representation)を求めたのである。この主張は、なるほど強いナショナリズムに貫かれている。しかしそれは普遍的な自由の要求として、最終的にはアメリカ植民地のみならず、全人類に妥当しうるものへ徹底されている<sup>(36)</sup>。つまり改革派のイデオロギーは、アメリカという(半)外部における(不)公正を問題にすることで、イギリス内部の(不)公正をめぐる議論を普遍化したのである。

メイスンとヨークシャー運動 この改革派のイデオロギーが庭園論と深く関連していたことを示す好例は、メイスンの詩、その名も『イングリッシュ・ガーデン』(1772-81年)であろう。四書からなるこの詩は、メイスンの作品の中で最も名高く、一九世紀にも広く読まれた<sup>(37)</sup>。その意味で、イングリッシュ・ガーデンにかんする標準的理解を作り上げた最重要のテキストの一つといえる。

なるほどイングリッシュ・ガーデンの原理を論述するこの詩は、一見、アクチュアルな政治史とは無関係に思える。しかしながらメイスンは、議会改革運動の震源地、ヨークシャーに住み、ほかならぬヨークシャー運動の中心メンバーとして活動した人物なのである。そしてこの政治参加の事実は、詳しく見れば、彼の詩にも色濃く反映しているのがわかる。

たとえば、この詩もウォールポール同様、「オリジナル」の語を用いつつイングリッシュ・ガーデンの自然性・独創性を説き、自然解放の進歩史観を採る<sup>(38)</sup>。とはいえその政治性がいっそうあらわになるのは、ヨークシャー運動の開始後に出た第四書である。そこでは庭園における「海外」の要素を排除し、イギリスに土着ないし自然的なものを尊ぶべきことが繰り返し主張される。そしてその末尾は、次の強い言葉で閉じられるのである。

この不幸な時代。略奪が称号を得て勝利を謳歌し、腐敗が時代の面前で臆面もなく旗を振る。……しかし平和の子供らは、落胆せず辛抱強く待ち望む。イギリスの古き精霊が、傷に苦しみつつも目覚める日を。その精霊とともに高潔、金銭と隷属への侮蔑、支配への自由な畏怖も目覚めよう。それが人民・貴族・君主の権利を定め、その上にブリテンの自由の荘厳な館を築いた。そして美しいアルピオン〔イギリス〕が専制君主の災厄、太洋の覇者、帝国の支配者として君臨するよう招いたのだ。長く失われた徳の一群よ。帰り来て……月桂樹の茂る森〔イングリッシュ・ガーデン〕を救いたまえ。<sup>(39)</sup>

たしかにこれも、われわれの目にはかならずしも特定の政治情勢と結びつくとは映らないであろう。また一八世紀前半のカントリー・イデオロギーを継承する部分も多い。しかしすでに大英帝国の広がりについて言及が、七年戦争・アメリカ独立戦争後の新しい対外

的まなざしをうかがわせる。のみならずメイスン自身がこの第四書につけた、次のあとがきを読めば、それがヨークシャー運動と深く関連していたことは疑いないものとなる。

〔第四書は〕かならずや一部読者の批判を招こう。党派的すぎるというのだ。それを認めるのにやぶさかではないが、とりあえずこう答えておく。問題は「党派」(Party)の語の意味である。かりに私的個人的動機から議会内で多数派・少数派をなしたり、同じく私的個人的原則から議会外で行政手段を承認・非難する人がいるとしよう。そういう人に「党派」の語を使うのは当然である。しかし現在のアメリカ戦争のような大問題は、人類の最重要の利害にかかわる。そこでは「党派」といった瑣末な語にはほとんど意味がない。……私の詩〔『イングリッシュ・ガーデン』〕のあらゆる部分は、私が「全人類という党」(THE PARTY OF HUMANITY)に属する証しである。<sup>(40)</sup>

これは改革派のイデオロギーの典型的な表明といえる。すなわち自由な憲法政体の護持は、私的・国内的党派心に発するものではなく、普遍的人間性に由来するというのである。しかもそれは、アメリカ植民地に代表される海外への対外的まなざしに支えられている。

しかしさらに、メイスンの言葉を額面通りに受け取れば、『イングリッシュ・ガーデン』という詩の全体が、全人類に普遍的に妥当することになる。そうなると政治的自由だけでなく、庭園における自然解放もまた、人類普遍の価値となるはずである。かくしてイギリスの自然に根づき、イギリスの独創たるイングリッシュ・ガーデンは、他国の人間が模倣すべき模範と化す。いってみればイングリッシュ・ガーデンは、本来的な価値の源オリジンを指定するという意味でも、「オリジナル」なものとなるのである。

#### 第四節 普遍的価値の源としてのオリジナリティー イングリッシュ・ガーデンの海外制覇に向けて

イングリッシュ・ガーデンはイギリス独自でありながら、同時に人類普遍の価値を体現する。この或る意味で矛盾した主張、ないしイングリッシュ・ガーデンの固有性(Eigentümlichkeit)から本来性(Eigentlichkeit)への転化は、以上見た一八世紀後半のイギリス庭園論すべてに潜在していたといえよう。つまりそこでイングリッシュ・ガーデンのオリジナリティーは、自然や歴史を支えにして、つねに普遍的価値のアウラをまとい、イギリスの先進性・優越性の証しとされる傾向にあったのである。

シェビーア イギリス固有のイングリッシュ・ガーデンが普遍的価値を体現するというこうした主張は、先にも言及したシェビーアの『イギリス国民についての書簡』(1755年)にもすでに見出せよう。既述のとおり同書は、或るイタリア人がイギリスの国民性について書いた手紙の英訳と仮託される。それはいわばイギリス人自身によるヴォルテールの『イギリス書簡』であり、海外からのまなざしをみずから設定することで、自国のナショナル・

アイデンティティー構築を企てるものといえる。

なるほどシェビーアは、庭園にかんしてはまだ「オリジナル」の語を用いてない。しかし実質的にイングリッシュ・ガーデンの自然性および独創性を主張し、一八世紀イギリスにおける自然解放の物語をおそらくはじめて明確に述べている。しかもそこにはイングリッシュ・ガーデンと政治性との結びつきすらうかがわれる。すなわちシェビーアは、庭園とそれを造り鑑賞する人間との間に「アナロジー」を措定するが、このアナロジーゆえに、たとえば幾何学的庭園は、利己的な国民精神の現われとなる。

古今のフランスやイタリアにおけるガーデニングの趣味は、庭園を人間のよう配置する。すなわち自己の像を、庭園のあらゆるデザインに行き渡らせる。一つの並木は、両足や両手に対応しあうようにもう一つの並木と呼応する。中央の通りは、胴体を表わすわけである。これは自己といった、利害関心にかかわる観念を捨てられない者の精神には、実に自然な配置法だ。とはいえこうした配置が模倣すべきものからすれば、きわめて不自然である。<sup>(41)</sup>

これに反しイングリッシュ・ガーデンは、自然に基づくのであるから、非利己的で共和主義的なイギリス人の精神の現われと考えられよう。すくなくともシェビーアによれば、それを造るには、普遍的な人間本性を感得できねばならない。

イギリス人は、人間本性 = 自然ヒューマンネイチャー (human nature) にまつわる感覚に特徴的な諸観念にしたがうことで、自国の庭園を優れて重要なものにした。そして庭園を、人間の心全般に付随するあらゆる状態へ適合させたのである。……庭園における真の趣味は、自然の様々な景観を見て、われわれが自分の内で感じるものに基づいて作られる。……われわれの心のあらゆる状態に対応する景観がなければ、庭園はすぐにつまらなくなる。〔強調引用者〕<sup>(42)</sup>

このような人間本性 = 自然に基づく感情性の重視は、以後、一八世紀後半の庭園美学における大きな特徴となる。かくしてシェビーアにおいてイングリッシュ・ガーデンは、普遍的人間本性をすべて知るイギリス人の先進性・優越性の証しとされている。

ウォールポールとスティール ここからイングリッシュ・ガーデンは、他国が模倣すべき模範となる。そうした主張の典型として、ウォールポールの『現代造園の趣味の歴史』(1771年)を引こう。既述のとおり同書は、進歩史観的な庭園史の定式化に最も寄与したテキストである<sup>(43)</sup>。ウォールポールは、そのような歴史を総括する箇所「オリジナル」の語を用いている。

〔イギリス人〕は、世界にガーデニングの真の模範を与えた。他国には、われわれの

趣味を猿真似 (mimic) したり、墮落させておこう。しかしわが国では、この趣味を緑の玉座に着かせ、統治させよ。それはみずからの優雅な純粹さによって、オリジナルなものである。それは自然の粗野な所を和らげ、自然の優美なタッチを模倣する以外、人工を誇ることはない。<sup>(44)</sup>

ここでも「オリジナル」の語は、自然的・独創的いずれにも取りうるであろう。しかもそれは、他国が（不完全な形で遅れて）真似すべき「模範」を指し示す。つまりイングリッシュ・ガーデンは、普遍的な価値の源としてのオリジナリティーをも獲得している。

この点は、ウォールポールの言葉をほとんどそのまま無断借用した、スティールの『ガーデニング試論』（1793年）においていっそう明らかになる。スティールは「オリジナル」の語こそ用いないが、しかし彼の主張は、ウォールポールの趣旨をナショナリスティックに過激化したものでしかない。

おもうに、この島〔イギリス〕でわれわれは今やガーデニングの真の模範を発見し、他国に掲げ示している。他国には、趣味を猿真似させておこう。ちょうど彼らが、自由を猿真似するように！！しかしわが国では、自然の厳格さを和らげ、自然の喜ばしい諸特徴に細心の注意を払うことで、ブリテンが純粹優美な優雅さにおいて、勝ち誇り統治するようにせよ！〔強調原文〕<sup>(45)</sup>

ここでスティールが、自らの流用しているウォールポールのテキストに施した、微妙な改変は注目に値しよう。まず顕著なのは、「統治する」(reign)の主語が入れ替わっていることである。すなわちウォールポールでは、統治するのは「われわれの趣味」であり、それはあくまでイギリス国内（「わが国では」）のことにすぎない。いいかえれば「統治」の語自体は、さしあたりイングリッシュ・ガーデンの自然性を主張するものとして用いられている。ところがスティールでは、「統治」の主語は、「ブリテン」である。その結果この統治は、「他国」にたいする「勝利」へと意味を拡大している。いいかえれば「統治」の語は、イングリッシュ・ガーデンの海外制覇を主張するものに転化しているのである。同様に、ウォールポールにおける「われわれの〔イギリス的〕趣味」が、スティールでは修飾語のない「趣味」へと一般化されている点、あるいはウォールポールにはない「この島」という語が現れる点も、このイングリッシュ・ガーデンの海外制覇を強調しよう。

さらにスティールは、「ちょうど彼ら〔他国の人々〕が、自由を猿真似するように」という、ウォールポールにはなかった論点を追加している。なるほどそれは、先にウォールポールが別の著書で強調していた、政治的自由と自然風庭園との結びつきをいっそう明確化したものともいえよう。しかし明らかにこの追加は、スティールの時代の新たな政治情勢を反映している。すなわちスティールは、フランス革命に言及しているのである。彼はここでフランス革命が、イギリス固有の自由を、極端かつ危険な仕方でするもの

にすぎないという、当時の反＝革命的イデオロギーを典型的な形で表明している。彼がウォールポールの比較的穏当な主張を、多くの感嘆符と大文字を加えて過激化せねばならなかったのは、まさしくこのフランス革命という、対外的危機への意識ゆえであった。

とはいえ、スティールによる過激化は唐突ではない。もしかすると彼は、ウォールポールを盗用しているという意識すらなく、危機に瀕した祖国のためそれを改良・喧伝しているとしか感じなかったかもしれない。すくなくともスティールの敷延そのものは、一八世紀後半の庭園論全体の傾向からすれば当然といえる。なぜならそこにおいてイングリッシュ・ガーデンの自然性・独創性は、普遍的価値の源を示すものとして、イギリスの一般的な先進性・優越性の証しとされる傾向にあった。しかもそれは、大英帝国の海外植民地管理をめぐる対外的なまなざしと深く結びついていた。してみればその中でイングリッシュ・ガーデンによる海外制覇が唱えられたとしても、なんら不思議はないのである。

### 結 イギリスのアイデンティティーと庭園

以上われわれは、イングリッシュ・ガーデンを自然に基づくイギリス独自の発明品とする今日の標準的理解が、一八世紀後半のイギリスにおける特殊な政治力学に支えられて生みだされたことを、当時の庭園論的言説にたどった。繰り返せば、そうしたイングリッシュ・ガーデンの自然性・独創性は、七年戦争後のイギリス内外の政治情勢、特にアメリカ独立戦争およびヨークシャー運動と深く関連しつつ、とりわけ改革派の政治的イデオロギーの表明として主張されたのである。しかもその結果、海外制覇にまでいたるイギリスの先進性・優越性が打ち立てられる。この主張は、当時イギリスで進行していた大きなアイデンティティー戦略の典型的現れと見ることができよう。最近の研究でコリーは、イギリスのナショナル・アイデンティティーが、一八世紀、特に七年戦争以降の対外戦争の中で、半ば人工的に「捏造」されたことを示した<sup>(46)</sup>。イングリッシュ・ガーデンのオリジナリティーもまた、そのようなアイデンティティー戦略の重要な一翼をになっていたと考えられるのである。

実際、一八世紀後半以降、イングリッシュ・ガーデンはヨーロッパ大陸で模倣され、さらにアメリカに受け継がれる。そしてその中で、以上見た主張も継承されてゆく。たとえば、一九世紀ドイツで影響の大きかったピュックラー＝ムスカウはいう。

私はことさらイギリスを持ち上げるが、これは流行やイギリス熱 (Anglomanie) のゆえではない。ただ次のように確信するからである。〔造園芸術は、〕高貴で (こういってよければ) ジェントルマン的な生活享受の芸術である。それは……女々しいアジア的贅沢とも、ヨーロッパ大陸の不潔な吝嗇ともかけ離れている (なお、後者は貧困ゆえではなく、俗悪な風習とぞんざいな家庭習慣ゆえだが)。そうした芸術にあってイギリスは、長くわれわれの到達できない模範であり続けよう。<sup>(47)</sup>

ここでもまたイングリッシュ・ガーデンは、イギリスの先進的な社会生活の証しとされている。

事情は本国イギリスでも変わらない。たしかに一九世紀イギリスでは、風景式庭園の偏重にたいする反省から、折衷的あるいはエキゾチックな庭園が主流となる。しかしたとえば、そうした一九世紀の様式を推進した代表的な造園家、ラウドンも、一八世紀的な言説を随所で継承している。すなわち彼は、ガーデニング全般にかんしてイギリスの優越性をほのめかし、しかもこの優越性が自由な政体に根拠をもつという、一八世紀そのままの主張を次のように繰り返す。もっともここでは、彼自身ないし一九世紀イギリス社会全体のブルジョア性を反映して、自由放任経済と社会秩序の維持がいっそう重視されているが。

ガーデニングの全部門は、国民が自由なとき最善となる。あらゆる自由な政治や社会は、最終的に財産を不規則なマスの形に集める傾向を示す。それはまさに、自然が己の全財産を分配したやり方と同じである。この不規則性がガーデニングに最も都合がよい。……共和制ないし代議制の政治、および商業的国民は、芸術全般にきわめて適するといえる。〔強調引用者〕<sup>(48)</sup>

ラウドンは、当代におけるこうした自由な社会の唯一の例として、イギリスを挙げる。つまりガーデニングにかんするイギリスの優越は、社会政治的根拠をもち、しかもこの根拠は「自然」に裏打ちされた普遍性を備えている。ここでもイングリッシュ・ガーデンは、本来的価値の源としてのオリジナリティーを付与されているのである。

今日、イングリッシュ・ガーデンは、わが国を含む世界中で模倣されている<sup>(49)</sup>。しかしその一見自然な表面の下に、以上のような政治力学が隠れていたことは、つねに想起されるべきであろう。

## 註

(1) 以下、「イギリス」は、取りあえず狭義のイングランドを指すこととする。ただし周知のとおりわが国では、ブリテン全体(連合王国)をイギリスと呼ぶ習慣が存在する。しかも一八世紀当時のイギリスにおいてすら、狭義のイングランドとブリテンとは混同される傾向があった。それゆえ以下でも、ブリテンとすべきところをイギリスとした場合がある。

(2) 風景式庭園とそれを支えた美学思想、および関連文献については、次の拙著参照。安西信一『イギリス風景式庭園の美学 開かれた庭のパラドックス』(東京大学出版会、2000)。

( 3 )たとえば、Thomas Whately, *Observations on Modern Gardening* (1770; rpt. New York: Garland, 1982), pp. 1, 152f. この点については、前掲拙著、14-16、206-08、234-35 頁とそこに付された註を参照。風景式庭園との関連で「自由七学芸」に言及した重要な例としては、Alexander Pope, 'Epistle to Burlington' (1731), l. 44, *The Poems of Alexander Pope: A One Volume Edition of the Twickenham Pope*, ed. John Butt (London: Routledge, 1992), p. 590.

( 4 )高橋裕子『イギリス美術』(岩波新書、1998) 206-08 頁。パノフスキーの引用は、次の論文から。エルヴィン・パノフスキー(高橋裕子訳)「ロールスロイスのラジエーター その観念的前史」、『iichiko』、No. 27 (1993) 58-85 頁。さらに、ニコラウス・ベヴスナー(友部直・蛭川久康訳)『英国美術の英国性 絵画と建築にみる文化の特質』(岩崎美術社、1981)をも参照。

( 5 )この点にかんしては、前掲拙著、第二部のほか、特に、Tom Williamson, *Polite Landscapes: Gardens and Society in Eighteenth-Century England* (Johns Hopkins University Press, 1995).

( 6 )前掲拙著、第六章参照。

( 7 )この点にかんしては特に、小田部胤久「独創性とその源泉」、『美術』、第 47 巻、第 4 号 (1997) 1-12 頁。

( 8 )前掲拙著、第七章参照。

( 9 )E.g., François-de Paule Latapie, 'Discours préliminaire du traducteur', Thomas Whately, *L'Art de former les jardins modernes, ou L'Art des jardins anglois*, trad. Latapie (1771; rpt. Genève: Minkoff, 1973).

( 10 ) Cf. John Dixon Hunt, *Garden and Grove: The Italian Renaissance Garden in the English Imagination: 1600-1750* (Princeton University Press, 1986).

( 11 ) John James (tr.), [Antoine Joseph Dezallier D'Argenville,] *The Theory and Practice of Gardening. . . Done from the French Original, printed at Paris, Anno 1709* (1712. Westmead, Hants.: Gregg, 1969), sig. A2.

( 12 ) [Joseph Addison,] *The Spectator*, No. 414 (Wednesday, June 25, 1712), ed. Donald F. Bond (Oxford University Press, 1965), III, 548-53 (551).

( 13 ) R. Bradley, *A Survey of the Ancient Husbandry and Gardening* (London, 1725), p. 359.

( 14 ) Ibid., pp. 360, 359.

( 15 ) Ibid., p. 360. チジックについては、John Harris, *The Palladian Revival: Lord Burlington, His Villa and Garden at Chiswick* (Yale University Press, 1994).

( 16 ) J. d. C., *Les Charmes de Stow* (Londres, 1748), rpt. *Descriptions of Lord Cobham's Gardens at Stowe (1700-1750)*, ed. G. B. Clarke, Buckinghamshire Record Society, No. 26 (1990), 158-73 (172).



(17) [John Shebbeare,] *Letters on the English Nation: by Battista Angeloni, A Jesuit, Who resided many years in London* (London, 1755), II, 266f.

(18) Whately, *Observations*, pp. 150-56.

(19) 前掲拙著、191-92 頁参照。

(20) Whately, *Observations*, p. 153.

(21) *Ibid.*, p. 151.

(22) *The Rise and Progress of the Present Taste in Planting Parks, Pleasure Grounds, Gardens, etc.* (1767; rpt. Newcastle upon Tyne: Oriel, 1970), p. 5.

(23) *Ibid.*, pp. 30f.

(24) *Ibid.*, p. 22.

(25) Thomas Gray, 'Letter VIII, Mr. Gray to Mr. How, Cambridge, Sept. 10, 1763', *The Poems of Mr. Gray*, ed. William Mason (York, 1775), p. 386f.

(26) *Satirical Poems Published Anonymously by William Mason: With Notes by Horace Walpole*, ed. Paget Toynbee (Oxford: Clarendon Press, 1924), p. 42.

(27) *Ibid.*, p. 44.

(28) *Ibid.*, p. 45.

(29) 前掲拙著、10-12 頁参照。

(30) *Satirical Poems*, p. 44.

(31) *Ibid.*, p. 32.

(32) *Ibid.*, p. 43.

(33) 前掲拙著、第五章；J・G・A・ポーコック「ケンブリッジ・パラダイムとスコットランド人哲学者　一八世紀社会思想のシヴィック・ヒューマニズム的解釈と市民法学的解釈との関係の研究」、ホント、イグナティエフ編著（水田洋・杉山忠平監訳）『富と徳　スコットランド啓蒙における経済学の形成』（未来社、1990）395-424 頁。

(34) Cf. クリストファ・ヒル（紀藤信義訳）『ノルマンの軛』（未来社、1960）第七章；Ian R. Christie, *Wilkes, Wyvill and Reform: The Parliamentary Reform Movement in British Politics 1760-1785* (1962; rpt. Aldershot, Hants.: Gregg, 1994); H. T. Dickinson, *Liberty and Property: Political Ideology in Eighteenth-Century Britain* (London: Methuen, 1979), Ch. 6.

(35) これらの事情にかんしては、以下の文献参照。Christopher Wyvill, *Political Papers*, Vol. 1 (York, ca. 1794); 青木康「ホイッグ党とヨークシャー運動」、『史学雑誌』、第 87 編、第 2 号（1978）139-73 頁；鈴木亮「ヨークシア連合運動とクリストファ・ワイヴィル」、宮本憲一・大江志乃夫・永井義雄編『市民社会の思想』（御茶の水書房、1983）211-35 頁；松園伸『産業社会の発展と議会政治　18 世紀イギリス史』（早稲田大学出版部、1999）；岸本広司『パーク政治思想の展開』（御茶の水書房、2000）。

(36) Cf. Richard Price, *Observations on Reversionary Payments* (London, 1771), esp.

pp. 275f.; リチャード・プライス (永井義雄訳) 『市民的自由』 (〔原著: 1776〕 未来社、1963)。

(37) Cf. John W. Draper, *William Mason: A Study in Eighteenth-Century Culture* (The New York University Press, 1924).

(38) William Mason, *The English Garden: A Poem, in Four Books. . . . A New Edition, Corrected: To Which are Added a Commentary and Notes, By W. Burgh* (1783. New York: Garland, 1982), Bk. I, ll. 386-535: pp. 18-24.

(39) *Ibid.*, Bk. IV, ll. 675-92: pp. 116f.

(40) *Ibid.*, pp. 242f.; originally, William Mason, 'General Postscript', *The English Garden: A Poem, in Four Books* (York, 1781), pp. 50f. なおメイスンは、ロンドン郊外のイングリッシュ・ガーデン、キュー庭園をめぐる、その設計者ウィリアム・チェインバースと激しい筆戦を行なうが、そこでの彼の攻撃は、ほとんどすべて、キューと結びついた「トーリーの」政権への政治的嘲笑に終始している。それについては、Draper, *op.cit.*のほか、次の拙稿参照。「埋められた不協和音 キュー庭園を巡るカンヴァセーション・ピーシーズ」、『ユリイカ』、1996～4、194-207頁。さらに、Samuel Klinger, 'Whig Aesthetics: A Phase of Eighteenth-Century Taste', *ELH (A Journal of English Literary History)*, Vol. 16, 1949, 135-50.

(41) Shebbeare, *op.cit.*, II, 267.

(42) *Ibid.*, II, 266, 270.

(43) Cf. Richard E. Quaintance, 'Walpole's Whig Interpretation of Landscaping History', *Studies in Eighteenth-Century Culture*, Vol. 9 (1979), 285-300; Stephen Bending, 'Re-Reading the Eighteenth-Century English Landscape Garden', Harriet Ritvo, et al. *An English Arcadia: Landscape and Architecture in Britain and America* (The Henry E. Huntington Library and Art Gallery, 1992), pp. 379-99; idem, 'Horace Walpole and Eighteenth-Century Garden History', *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes*, Vol. 57 (1994), 209-226; 'A Natural Revolution?: Garden Politics in Eighteenth-Century England', Kevin Sharpe and Steven N. Zwicker (eds.), *Refiguring Revolutions: Aesthetics and Politics from the English Revolution to the Romantic Revolution* (Berkeley: University of California Press, 1998), pp. 241-66. ウォールポールの庭園観全般についてはさらに、Isabel Wakelin Urban Chase, *Horace Walpole: Gardenist* (Princeton University Press, 1943). なお一般に、彼が著わした歴史書、『ジョージ二世の治世』および『ジョージ三世の治世』は、一九世紀におけるホイッグ史観・進歩史観の最も重要な先駆けである。Cf. Gerrit P. Judd, IV, *Horace Walpole's Memoirs* (London: Vision, 1960), pp. 86ff.

(44) Horace Walpole, *The History of the Modern Taste in Gardening* (1771; 1785; 1827. New York: Garland, 1982), p. 277.

( 45 ) Richard Steele, *An Essay upon Gardening* (York, 1793), p. 132. なおこのスタイルは、一八世紀初頭に活躍した同姓同名の文人・ジャーナリストとは別人。

( 46 ) Linda Colley, *Britons: Forging the Nation 1707-1837* (Yale University Press, 1992). この点にかんする文献は多いが、小著ながら、谷川稔『国民国家とナショナリズム』(山川出版社、1999) 参照。

( 47 ) Hermann Fürst von Pückler-Muskau, *Andeutungen über Landschaftsgärtnerei* (1834; Leipzig: Friedrich, 1911), SS. vii.

( 48 ) Claudius John Loudon, *An Encyclopaedia of Gardening* (1822; rev. ed., 1835; rpt. New York: Garland, 1982), I, 419.

( 49 ) 拙稿「ピクチャレスクの『移植』 英国式庭園から現代へ」、金田晋編『芸術学の100年』(勁草書房、2000) 156-88 頁参照。